第２回高知県社会教育委員会（令和３年４月１日～令和５年３月 31 日任期）会議概要

令和３年 10 月 22 日（金）14:00～16:00
高知県立塩見記念青少年プラザ５階　多目的室
出席委員（久寿久美子、竹村淳子、仲村貴介、
森岡千晴、岩井拓史、川田米實、
眞鍋大輔、廣末ゆか、斉藤雅洋、
松田弥花）

１　開会（14:00～14:05）
高知県社会教育委員長挨拶

２　議事（14:05～15:55）
テーマ：「新しい生活様式」の中での社会教育の在り方
（１）課題の整理・論点の焦点化…事務局より説明（資料１～３参照）
（２）高知県版地域学校協働本部の取組について…事務局からの概要説明
竹村委員・久寿委員から実践例の紹介

（１）課題の整理・論点の焦点化
（委員長）
前回の協議を基に今後の協議の方向性を決める。
（委員）
テーマが対象とする範囲が広いので、限られた時間で十分な議論を重ねるために、分野を絞っていく必要がある。
（委員）
学校の中での社会教育の位置づけについて物足りなさを感じる。もう少し学校現場と社会教育との交流が図れれば、先生方の社会教育に対する理解も進むのではないか。
（委員長）
協議の方向性については、以下の３つを柱とする。
１．公民館等の社会教育施設の取組の工夫
２．居場所づくりの確保の充実
３．地域学校協働本部事業（学校との連携）の拡充

（２）高知県版地域学校協働本部の取組について
（委員長）
今後の協議の方向性が決まったところで、これより学習会に移行する。
今回は、今後の協議の柱の一つでもある、地域学校協働本部事業についてを予定している。
まずは事務局に事業の概要説明を求める。

（事務局）
　地域学校協働活動とは、「学校を核とした地域づくり」を目指す活動であり、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えようという取組。
　県内の各小中学校の内、９割以上の学校に地域学校協働活動の本部が設置されており、地域で子どもを育てる土台作りが浸透している。
　高知県では、特に子どもへの見守り機能を重視しており、民生委員をはじめとする地域の方が気づいた異変などをいち早く学校が把握できる体制づくりが必要と考えており、地域学校協働本部をさらに進めた、「高知県版地域学校協働本部」の設置を推し進めている。
（委員長）
　今期の委員の中には、地域と学校の連携について、現場で中心となって取り組まれている方がおられるので、その実践例をご紹介いただきたい。
（竹村委員）
　現在の学校に赴任し、コミュニティ・スクールを立ち上げた。
　当初は関係者の全員が手探り状態ということもあり、発言も疎らなこともあったが、目指す姿を決めた以降は活発な意見交換がなされるようになった。
　子どもも地域も両方が元気になっていかなくてはいけないということで、「子どもが輝く学校づくり！笑顔と活気があふれる地域づくり！」に向けて始動する。
　香長小学校では、学校運営協議会の会長を公民館長が担っている。
　委員から「コミュニティ・スクール」や「地域学校協働本部」という名称では、何を目指すかわかりにくいという意見があり、「香長っ子もりあげ隊」という呼称をつけることで目的意識の共有につながった。
　主な活動を「学習」、「環境」、「行事」、「見守り」に分け、様々な角度から子どもと地域とが盛り上がる取組を実施しており、その活動は、回覧板やＳＮＳを通じて発信している。
（久寿委員）
　重度の障がいを抱える子どもの成長を地域で見守っている。
　支援員や医療関係者など、学校以外の方と連携を図ることで地域の中で育てることができている。
　それを実現たらしめている大きな要因は、学校運営協議会によって地域のみんなで子ども達を育てるべきとする議論がされていることにある。
　実際、学校運営協議会から教育委員会あてに提言が届き、予算化したものもある。
　勉学についても、その子に応じた教科やカリキュラムとは何かを学校運営協議会の中で真剣に協議している。
　真剣だからこそ、時には反対する意見もあるが、意見を交わし、難題を難題としないよう、明るく前向きに進んでいくことが大切。
（委員長）
　質問や意見はないか。
（委員）

地域との深いつながりが感じられたが、そうした部分は小人数だからできた取組なのか。

（竹村委員）

活動の運営に先駆け他県の大規模校に視察に赴いたが、地域を巻き込んだ素晴らしい活動が実施されていたので、小規模だからできたというわけではないと考えている。

（久寿委員）

学校を核とした地域づくりは学校の管理職の手腕によるところが大きい。学校現場には、管理職を中心に、しっかりとした組織づくりが求められるので、行政はそのサポートをしていかなければならない。

（委員長）

公民館長が学校運営協議会に委員として関わっていることは、学校と地域を繋ぐうえで非常に素晴らしい体制と感じる。

（委員）

組織づくりに課題があるとのことだが、もう少し詳しく知りたい。

（竹村委員）

学校運営協議会でさまざまな協議を重ね、地域学校協働本部で実践する流れとなっているが、重複しているメンバーも多い。今後の課題としては、子ども達のことや地域のことを真剣に考えてくれる人材をまきこんでいくことや育てていくことなど、多様な人材の確保が挙げられる。

（委員長）

取組を進めていくうえで、あせらずに時間をかけ、長期的な展望を見越すことはとても大切な視点。

実践の中で、子ども達が経験したことをうまく生活に活かすことができていると感じたが、社会教育において、経験を学びとして活かすことができるようになることはとても重要な部分である。

（委員）

コミュニティ・スクールを立ち上げる際、目指す子どもの姿を定めたことで意見や活動が盛んになったと伺った。学校を核に地域課題を解決することに限らず、何かを推進する場合、何を目指すのかというイメージの共有化を図ることがいかに重要かを再認識した。

その上で、コロナ禍でも家庭・学校・地域との繋がりや知の循環を途絶えさせないために、生涯学習という大きな流れの中に学校教育や社会教育もあるという意識の統一化をしていくべきと考える。

（委員）

学校運営協議会では、学力をどう伸ばすかが話題の中心になりがちだが、地域課題を考える組織体系は非常に素晴らしいと感じた。

（委員）

学校現場の多忙さは想像に難くない。そのような中、立ち上げから現在のような充実した取組に昇華させるまでのアプローチを知りたい。

また、小学校から中学校、高校へ取組をどのようにして引き継いでいくのか。

（久寿委員）
　津野町では、兄弟姉妹などにより、学校をまたいでも役員が同じということは珍しくない。そのような地域性を活かし、学校単位で考えるのではなく、地域全体で考える場を大切にしている。
　いきなりすべての学校で同じように推進することは難しいので、まずはモデル校で実践し、少しずつ他の学校にも取組を浸透させていった。
　地域で行事があれば学校が手伝いに行くなど、地域と共に活動していくことがとても重要。
（竹村委員）
　学校現場は想像されるように多忙を極めている。しかし、子ども達のことを思えば行動しなければならない。
　子ども達が何かをすれば、地域の方が褒めてくれるようになっていく。褒められることで子どもはどんどん成長していく。
（委員）
　とある著書に、東日本大震災において被災した学校では、地域コミュニティとの接点が殆どなかったという一文があった。普段から地域と繋がりがあり、防災についても地域課題として取扱っていたら、避難方法についても、違う選択肢を選ぶことができたかも知れない。こうしたことからも、日常的に地域とつながる方法がいかに重要であるかが伺える。その意識付けをどのようにしてつくっていくか、核となる学校の管理職の役割は非常に重要。
　学校をプラットホームとした活動をしていくにはどうすればいいかを考えなければならない。
（竹村委員）
　かつては地域コミュニティの核は公民館だったが、現在は活動が衰退してしまっている現状がある。
　そうした背景から、学校を核とした地域との連携に着手した。
（委員）
　若者世代の意見として、学校の取組について、意外と知らないことが多いと感じている。
　子育て世帯はＰＴＡとして関わることがあるが、そうでない者にとっては関わる機会が少ないことが要因ではないか。
　社会教育に対する学校の理解や協力についても、学校によって差が大きいと感じている。特に青年団は若者世代で構成されているので、同世代の若年教員の方々にもう少し地域や社会教育に目を向けていただくことで、地域の若者と学校とがうまく連携することができるのではないか。
（竹村委員）
　勤続年数の少ない先生方は、授業やクラス運営等、学校内の取組に順応することで手がいっぱいになってしまう。その上で地域にも目を向けることは非常に困難ではあるが、総合的な学習の時間等をつかって、地域課題を探す教員もいる。管理職として、若手に限らず、地域に目を向けられる教員を育てていきたいと考えている。
（委員長）

次回は、現地視察を予定している。

3　閉会（15:55～16:00）
　生涯学習課長挨拶